

課題レポート作成例)

1 研究テーマ（題目）

自殺予防のための支援の質を高めるための研究

2 研究テーマに関する社会的課題

筆者は中学校時代に同級生を自死にて失った経験がある。その時その兆候にまったく気づけず、この出来事に何もできなかった自分に無力感を強く覚え、大切な人を喪失する衝撃の直撃に打ちのめされた。

自殺予防については、国において 2006 年に自殺対策基本法が制定され、法に基づいた自殺総合対策大綱が定められた。大綱によれば「誰も自殺に追い込まれることのない社会の実現を目指す」ため、様々な施策が掲げられている。

しかし、「令和 5 年中における自殺の状況（厚生労働省/警察庁:2024）」によれば、全体としては令和 4 年より 44 人減少したものの、小中高生の自殺者数は 514 名と過去最高となった令和 4 年値（514 名）と同水準の状況となっている。これを受け政府は「こどもの自殺対策緊急強化プラン」を策定し『『若者の自殺危機対応チーム』を都道府県等に設置し、自殺未遂歴や自傷行為の経験等がある若者など市町村では対応が困難な場合に、助言等を行うモデル事業の拡充」などハード面の対応は行っている。また、第 3 次自殺総合対策大綱では「SOS の出し方に関する教育」を推進するなど自殺予防教育にも力を入れ、一定の成果をあげている（新井:2024, 江畑・松本ら:2024 など）。

一方、日本財団が 2022 年に行った「第 5 回自殺意識全国調査」では「死にたいと思う若者の半分以上が友人にも誰にも相談していない」というデータや「希死念慮を知られたくない、相談したいと思えない抵抗感がある」との分析がある。

このようにハード面の進化やソフト面の成長はあるものの、自殺者数の大きな減少には至っていない現状を考えると、自殺予防のための支援の質の向上、とくに周囲の人間の対応の質向上が急務なのではないかと考える。

3 研究テーマに関する先行研究

「自殺予防」におけると周囲の人間の対応の質に関心があるため、心理職者ではない者の受容的態度についての研究を調べた。

① 教師の受容的態度と学級での三者関係が児童の感情に及ぼす影響

筆者：大久保智生・加藤弘通・江村早紀・大沼泰枝

発行年：2021 年

本研究は、学校教師の受容的態度が児童に与える影響を教師と当該児童以外の他者（友人）を交えての三者関係において捉えることを目的としている。本研究における具体的な受容的態度とは教師の「ほめ」「励まし」「傾聴」の 3 つの態度を指す。結果としては、三者間すべての関係性が教師からの受容的態度に対する感情に影響を与えていた。つまり、教師からの受容的態度に対する感情は第三者である友人との関係も影響を与えている可能性が示唆された。とくに「傾聴」は他者が存在しない方が受容的態度に対する感情が高くなる傾向を示唆した。

② メンタルヘルスサポーターの自己効力感と活動による意識・態度・行動の変化に関する自己評価

筆者：播摩優子・佐々木久長

発行年：2018 年

本研究は、メンタルヘルスサポーターの活動に対する自己効力感と意識・態度・行動の変化の自己評価との関連について調査したものである。とくに自殺予防においてはゲートキーパーとして養成が進んでおり、ゲートキーパー教育が参加者の意欲・態度・効能に影響を与えている可能性が示唆されていたが、数値的な検証は行われていなかったため、本研究では量的に検討する。

結果は、ゲートキーパー教育の経験が参加者の関心や意識を高めること、多様性を認める態度や研修を継続する行動などに変化が見られた。

③××●□÷ | | ¥

4 先行研究に対する批判的論考

先行研究からは、受容的態度は対象者に対してよい影響を与える可能性を示唆している。また、養成研修は実施者自身の意識や態度、行動に変化をもたらす可能性が確認できた。しかし、これらの研究は対応とその結果としてのアウトプットを見ての結果であり、受容的態度の質については示されていない。受容的態度の実践とはどういうものかの理解、またそれがどのように対象者に利いたのかといった作用機序、さらには実践者である話の聞き手が傾聴中にどのような経験をするか、などの点については取り扱われている研究は見当たらなかった。しかし、これらの領域について丁寧に描写することが受容的態度の質向上においては重要な示唆を与えるものと考えられる。

5 文献

新井雅（2024）小学生を対象とした SOS の出し方・受け止め方に関する教育の実践：被援助志向性、援助・被援助のスキル、抑うつ症状に及ぼす効果の検討 発達心理学研究, 35(2), 80-92.

江畑慎吾・松本拓真・大谷和大・山村麻予（2024）中学生を対象とした SOS の出し方教育の実践と効果に関する考察—ストレスマネジメント型と相互援助型の比較から— 学校心理学研究, 23(2), 165-179.

播摩優子・佐々木久長（2018）メンタルヘルスサポーターの自己効力感と活動による意識・態度・行動の変化に関する自己評価. 秋田大学保健学専攻紀要, 26(1), 79-85.

大久保智生・加藤弘通・江村早紀・大沼泰枝（2021）教師の受容的態度と学級での三者関係が児童の感情に及ぼす影響 香川大学教育実践総合研究, 42, 37-48.

※文献は、論文著者（複数名の場合は筆頭著者）のイニシャルのアルファベット順に掲載します。